

論 説

熊本地震と防災オープンスペース再考

蓑茂 壽太郎

(一般財団法人 公園財団 理事長)

【要旨】

本稿は、気象庁命名（平成 28 年 4 月 15 日 10 時 30 分発表）の「平成 28 年熊本地震」（以下、熊本地震という）の経験を経て、防災及び減災に資するオープンスペースについて新たな計画の視点を獲得する狙いで、地殻災害時代のグリーンインフラとパークマネジメントの観点から論じるものである。都市公園が誕生して 180 年に近づこうとしている。これが社会の進展に応じて持続的に価値を発揮し続けるには、公園の「進化」に係る議論が欠かせない。このことは緑地にも言え、周りの変化を見極めて自らが変わることによって存続が可能となる。進化が図れず消極的な保存の論理では、無駄な空間と目に映り、荒地状態だと安心安全にも問題が見られ迷惑空間となる。つまりオープンスペース・自由空地本来の理念から掛離れた場になってしまう。ここで「進化」とは、時代と共に変化する社会、例えば周辺の土地利用などの環境の変化を考慮しつつ公園や緑地の利用・運営・管理を改革し、そして再デザインすることまでを含んでいる。もし現代を大災害時代と認識するのが妥当であるなら、これも社会の変化の一つで、災害に立ち向かう防災オープンスペースの計画を再考することは公園緑地の進化論につながる重要な機会だと考える。

研究成果

都心部における環境文化資源を活かした地域活性化の取り組み

堀江 典子

【要旨】

京都市下京区の下木屋町エリアにおいて、環境文化資源である高瀬川を中心とした地域の記憶を記録し「高瀬川ききみる新聞」等で発信するとともに、仏光寺公園前に川床「高瀬川ききみずガーデン」を設置し川に親しみながら新旧住民と来訪者が交流できるイベントを企画運営した。地域課題に対し、行政主導でも既存団体主導でもない有志の人的ネットワークを構築しつつ地域の風情を尊重した地域活性化の取り組みの経緯を報告し、可能性と課題を考察する。

【キーワード】

高瀬川、仏光寺公園、地域活性化、記憶の継承、情報発信、川床イベント

熊本地震における避難場所としての都市公園の役割と課題

平松 玲治 青木 明代

【要旨】

熊本地震が発生した熊本市の5箇所の都市公園を対象に、災害時に避難者の受け入れ等の対応を行った公園愛護会等の地域住民への聴き取り調査をもとに、災害時の避難場所としての役割と課題について考察した。その結果、都市公園は地域住民が主体の活動により避難場所として十分機能し、小学校等の避難所を補完する機能も有していたことが確認された。また、災害時における防災・防犯活動により地域の状態の回復に貢献し、災害の経験を契機とした地域への参画促進により、地域の状態を向上させる媒介となることが確認された。今後の課題は、地域による防災行動を担保できる体制の継続、災害想定やそれに合わせた災害訓練の実施、施設の充実と使用法の周知であることが把握された。

【キーワード】

熊本地震, 住区基幹公園, 地域住民, 避難場所, ヒアリング

都市公園における災害時の指定管理者等の役割に関する考察

青木 明代 平松 玲治

【要旨】

都市公園における指定管理者制度導入や、国営公園の管理への市場化テストの導入にともない、国や地方公共団体にかわり、指定管理者や管理受託者として民間等が公園管理に参入し、その件数は年々増加している。南海トラフ地震や首都直下地震等、大規模地震への国の対策も強化されている昨今、指定管理者等が公園管理者として行うべき災害への備え、役割はより重要になってきている。本稿では、平成23年の東日本大震災、平成28年4月の熊本地震において、主に災害を経験した指定管理者等の対応から確認された事実と公園設置者から求められる災害対応業務から、役割と課題を整理した。役割として、指定管理者等が現場に常駐していることから迅速な初動対応ができたことの確認、復旧・復興段階における公園利用機能回復のための業務の必要性、そのほか初動から復興までのいずれの段階においても、事前準備の必要性がみられたことを示したほか、課題として、災害時の指定管理者の利用料収入、指定管理料、スタッフ雇用の問題を挙げた。

【キーワード】

都市公園, 指定管理者, 市場化テスト, 災害

新聞報道からみた熊本地震での公園の役割について

松本 圭代 平松 玲治

【要旨】

平成28年熊本地震において公園が果たした役割について、熊本地震を伝える新聞記事の中から都市公園に関する内容を抽出してまとめ、今後の震災時の公園管理運営の役割と課題を考察した。その結果、公園は、本来のレクリエーション機能のほかに、避難場所、支援拠点、仮設住宅建設用地、震災ごみの集積場所として役割

を果たしていたことが確認された。特に中長期的な避難場所や支援拠点として取り上げられる傾向にあることが特徴である。公園の管理運営からみた課題は、救援物資の配布や安全・健康管理、企業や自治体・ボランティアと連携する体制づくりであり、公園が立地する地域の特性、時間経過による用途の変化を考慮して、震災時の利用の設定をしなければならないことが考察された。

【キーワード】

熊本地震、公園、新聞記事、利用調査

国営昭和記念公園における外国人の利用向上のための調査研究

尹 紋榮 浅田 増美

【要旨】

国営昭和記念公園を対象として、外国人の利用を向上させるための運営手法のあり方や改善案について、外国人来園者、公園スタッフの視点から問題を捉え、考察した。その結果、公園に訪れた外国人は20代や30代といった若い層が多く、在日外国人は花の観察やイベントに参加するため、訪日外国人は自然観察や日本らしい風景を求めて来園することが把握できた。しかし、イベント、アクセス、花等の事前情報提供の方法やその内容が不足していると感じていること、また、案内サイン等での誤訳、表記の不統一等、運営上の課題も明らかになった。

【キーワード】

国営昭和記念公園、公園スタッフ、外国人来園者、アンケート、モニター調査

国営みちのく杜の湖畔公園における巨大藁人形の展示について

土方 敏彦 平松 玲治

【要旨】

国営みちのく杜の湖畔公園内の古民家等を移築展示した施設ふるさと村にて、平成27年3月に宮城県では初めて、秋田県の民俗信仰の神様「鹿島様」を製作し展示する事業を行った。本報告では、みちのく公園に秋田県湯沢市の「鹿島様」の製作展示を実施した経緯、展示の事前の準備、秋田県湯沢市末広町の皆さん等の製作協力者との調整、「鹿島様」製作の実施状況等について、時系列で整理して記述した。展示期間中の利用者の反応は、概ね好評であり、特にインターネット上での書込みが多数確認された。課題として、製作協力者が高齢であることが挙げられるが、湯沢市との協力関係は継続しており、今回使用した材料を一部再度利用出来ることなどから、次年度以降に再度製作する可能性も示唆される。

【キーワード】

みちのく杜の湖畔公園、巨大藁人形、鹿島様、民俗信仰、展示

夢プランの果たした効果と公園・夢プラン大賞への変遷

高橋 悦子

【要旨】

平成8年から国営公園においてはじまった「夢プラン」は、国営公園利用における規制緩和、市民参加活動の支援と推進、イベントにおける社会的ニーズの反映などの効果をもたらした。この成果を受けて、「夢プラン」は平成25年に全国の都市公園等での市民の活動及びアイデアを募集、審査し表彰する「公園・夢プラン大賞」にリニューアルした。リニューアル当初より、公園が地域の拠点となって地域活性化する活動や公園を活性化させる市民の活動などが応募され、市民が公園で様々な活動を行っている状況が明らかになった。

【キーワード】

夢プラン、公園・夢プラン大賞、国営公園、都市公園、市民参加活動、行催事、地域活性化

フランスのアルビ市におけるオープンスペースの魅力向上の取り組みと観光

嶺岸 さゆり

【要旨】

「アルビの司教都市」として世界遺産に登録されているフランスのアルビ市において、中心市街地のオープンスペースに着目し、アルビ市が実施したその魅力を高める取り組みについて整理し、考察した。アルビ市ではオープンスペースのストックを活用して美しく快適な環境をつくるとともに、世界遺産の暫定リスト入りを契機に、オープンスペースの修景の強化と戦略的な再整備が並行して行われたことが確認できた。これらの取り組みに加え、評価制度を活用したことが相互に影響し、市民と観光客双方にとって魅力的な環境が整備されるという好循環が生まれ、世界遺産登録後のアルビ市における観光客の増加につながっていることがうかがわれた。

【キーワード】

オープンスペース、修景、再整備、評価制度、観光